

れんぎ  
認定特定非営利活動法人 日本雲南<sup>れんぎ</sup> 聯誼協会  
【東京本部】〒162-0846 東京都新宿区市谷左内町 21-13 1 階  
Tel:03-5206-5260 Fax:03-5206-5261  
Email:yunnan@jyfa.org URL:http://www.jyfa.org/  
【雲南支部】中国雲南省昆明市人民東路 289 号集大広場 2011 室  
Tel.+86-871-63311468 Fax.+86-871-63320658  
f http://www.facebook.com/NPO.JYFA @jyfa  
ブログ 雲南の郵便屋さん 検索  
編集・発行人 初鹿野 惠蘭  
印刷協力 昭和情報プロセス(株) (株)技術評論社 / デザイン Hope Company



Japan Yunnan  
Friendship Association

# 彩雲の南

第53号 特別号

発行日 2015年(平成27年)5月15日

会報

## 第2回 日本雲南大学生交流スタディツアー活動報告

「雲南で学生ならではの社会貢献が実現しました！」



2015年3月3日(火)～3月14日(土)、昨年に引き続き「第2回日本雲南大学生交流スタディツアー」を開催いたしました！この事業は日本雲南聯誼協会の「アジア未来への人材プロジェクト」の一環として行っているツアーで、フィールドワークを通して日本と中国雲南省の大学生が双方の見識と信頼関係を深めながら、「大学生だからこそ出来る『社会貢献プラン』」を発表します。その際に、各大学の

先生方に発表を審査していただき、優秀賞チームが決定されます。今回、日本側からは公募で集まった8大学9名(女性9名)が参加し、雲南側からは協会と提携する4大学から少数民族を含む16名の大学生が集まり、日本・中国側合わせて25名の大学生が事前学習会を通して全8チームに分かれました。本ツアーは第1回参加学生の強い希望により開催が実現し、その中でも口腔衛

生チーム栄養教育チームは第1回にも参加した学生により構成されています。4日間の老村小学校訪問では栄養改善チームは会員の新田真弓様にご寄贈いただいた体脂肪計で小学生の身長と体重、体脂肪を測り、栄養教育を行いました。また口腔衛生チームは手作りの小道具を使った劇を発表し、川西商事株式会社様より406本、デンタルプロ株式会社様より200本ご提供して頂いた歯ブラシで歯磨

きの実践演習をしました。大学生たちがそれぞれ小学校の子どもたちに日本の味を知ってもらうため「日本の国民食『カレーライス』」約200食分を振舞いました。このように、多くの方々からご協力を頂き、「社会貢献プラン」は形作られていきました。

今回の発表審査会では、どのチームも社会貢献プランがしっかりと作り込まれていると審査員の方から好評をいただきました。審査会での学生たちの成長した姿はいわば努力の結晶が実を結んだ瞬間だと感じます。

異国の人と話し、考え、共に活動すること。この力はこれから社会に旅立とうとする学生たちにとって大変貴重な経験であり、また絆を深め仲間になることが日本雲南の友好の第一歩であり、この友好が次の世代へと受け継がれ、友好の輪が広がり続けていくことを願っております。また、様々なご寄付をいただいた会員、企業の皆様にはこの場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

ただ今、8月19日(休)～8月29日(土)に開催される「第3回日本雲南大学生交流スタディツアー」の準備を着々と進めています。

「アジアの未来に貢献したい」と考えている大学生の皆さん。現地の大学生と一緒に「学生だからこそ出来る社会貢献」を考えてみませんか？

### スタディツアー日程表

- 3月3日(火)：成田空港から成都・北京経由で昆明へ
- 4日(火)：雲南師範大学にてオリエンテーション。理事長初鹿野惠蘭の挨拶後、アイスブレイキングやダンスをして交流を深める。その後は各グループで行動計画表を作成する。夕食は各国の伝統料理をつくって懇親会！
- 5日(水)：昆明市内でチームごとにフィールドワークを実施。模擬授業の準備をしたり勉強会を行う。雲南省招商合作局・杜勇局長のご招待で会食に参加。
- 6日(木)：雲南少数民族村を訪問。中国少数民族の生活や文化を体験する。村でのフィールドワークをする準備をするグループも。
- 7日(金)：2つのグループに分かれ、協会支援第19校目老木壩小学校、第21校目老村小学校に宿泊。全員で小学校の教室で寝袋で就寝！
- 8日(土)：各村、小学校の子どもたちと一緒に家庭訪問と模擬授業を実施。
- 9日(日)：仲良くなった子どもたちとの送別会。日本で練習してきたダンスを披露！
- 10日(月)：子どもたちと涙のお別れをした後は昆明へ移動。各自午後から発表審査会準備をスタート！
- 11日(火)：発表準備。追加でフィールドワークを行うグループも。
- 12日(水)：いよいよ発表審査会前日。寝る時間を惜しんで貫徹したグループや模擬発表の練習まで行ったチームも！後もう少し、頑張る！！
- 13日(木)：発表審査会。1日かけて社会貢献プラン発表審査会を実施！全員、チームの発表に質問・意見をぶつけ合う熱中ぶり！
- 14日(金)：参加者全員お揃いのパーカーにコメントを書き終えた後、日本へ無事に帰国



### スタディツアー団長挨拶 林 則幸

私たち日本雲南聯誼協会は、雲南省貧困地域の小学校建設から大学生への教育支援まで、一貫して雲南省における教育支援を活動の中心として行なってきました。「学校に行くことができる環境づくり」から「社会に役立つ人材の育成」そして「学生自身による、より良い社会の実現」を大きな目標に掲げ、様々なプロジェクトを進めています。

特に「日雲大学生交流スタディツアー」は、日本と雲南の大学生同士が国境を越えてつながり、公益性のある直接的な社会貢献を考えることからスタートしました。

今回は日本企業の協力と雲南省地元住民を巻き込んで、具体的なプランを実行することができました。これは参加した日本と雲南省の大学生が真剣に考え、体験し、壁を乗り越え、互いに影響しあったからこそ実現出来たものです。そして大学生たちが訪問した村での実験授業やボランティア活動が刺激となり、地元住民の意識をも変えました。今回のスタディツアーが残した本場の意義は「小さなアイデアから人々の共感を掘り起こし、より良い社会を実現しよう」という意識の種を蒔いたことです。

皆さんも一緒に考え、末永くこのスタディツアーの応援をお願いいたします。

### 参加者(敬称略・順不同)

【日本】天野結生、荒木美紀、木下千尋、佐生明佳、佐藤安奈、藤田はるひ、三浦愛、御崎いづみ、渡部優美【雲南】劉依萌、甘黎、文家豪、苞西、卞子豪、謝曦翎、朱京、劉慧娟、楊滄、張昱、石静、王婉婷、金茹秀、雷会蘭、秦德英、王成斌【認定NPO法人日本雲南聯誼協会】東京本部 理事長 初鹿野惠蘭、林則幸、廣瀬園子 雲南支部、劉泓翰、秦德英

### 協力者の皆様

日本：技術評論社、川西商事株式会社、デンタルプロ株式会社、ハウス食品株式会社、新田真弓様  
中国：雲南師範大学、老村小学校、老木壩小学校、雲南省環境保護庁、雲南省昆明市海外旅行会社・宋東升様、昆明理工大学質量発展研究大学院教授・齊虹麗先生、雲南民族大学日本語学科日本語教師・後藤裕人先生、雲南大学滇池学院日本語教師・李淑娜先生、雲南大学日本語教師・李月婷先生、陸欣妍



**チーム1 栄養改善**

私たちは前回の食と健康の活動を引き継ぎ、「栄養教育で健やかな成長」をテーマにしました。雲南大学ではメンバー同士で老村での栄養教育の授業で教える栄養知識などを共有し、授業で使う内容を模造紙にまとめました。村の小学校では①食事情の調査(給食の観察、聞き取り)、②身体測定、③栄養教育(3色の栄養素とその働き)の3つを行いました。①と②の結果、身長や体重が日本の子供と比較して年齢を重ねる程差が大きいこと、給食を残す量とお菓子を食べる量が多いことが判明しました。そこで私たちは③を行った上で「駄菓子屋さんの営業時間を制限すること」を提案しました。給食の前後の時間に閉店するだけでなく、子供達の学校へ来る楽しみを奪わず、自然と給食を食べる量を増やせます。また先生方から「給食を残す子供への声掛け」をお願いしました。③で「ご飯をしっかり食べる」意識付けを行ったので、声掛けが更に効果的な対策になりました。

今回栄養改善プロジェクトを1歩進めることができましたがまだまだ調査段階です。身体測定を定期的に行い、引き続き現地に合ったプランを考える必要があります。

埼玉県立大学：渡部優美  
雲南大学演池学院：謝曜暉、雲南大学：楊滄



**チーム2 口腔衛生**

私たちのテーマは「口腔衛生」とありますが実際には「より良い村になるためにはどうしたらよいか」というのが幹幹です。なぜなら主体は小学校の先生方、子供たち、また村の人たちであるためです。もし歯磨きの習慣がない彼らに、私たちが歯磨きを教えるというスタンスならこちら側の「～してあげる」精神が消えず、また、彼らも村のことを何も知らない「部外者」として私たちのことを扱うため、このプロジェクトは上手いかないでしょう。そこで、このテーマに設定することで、彼らも我々も一緒に立場で考えられると思いました。

今回の目的は村の方々が歯磨きの重要性を学び、日本企業から提供していただいた歯ブラシを配ることです。私たちが行ったことは行ったことは①小学校の先生方、子供たち、村の人たちと信頼関係を築く、②劇やポスターにより、歯磨きの重要性を教える、③日本の企業からの歯ブラシ提供の3つです。

結果としては、子供たちは歯磨きをするようになり、大人たちが歯磨きについて関心を持つようになりました。しかし、今後どのようにするかといった様々な課題があります。

専修大学：木下千尋、雲南大学演池学院：朱京雲、雲南民族大学：文家豪



**チーム3 労働**

私たちのチームは農村部の小・中学生に対し多くの職業を知るきっかけを作ることに着眼点を絞りました。雲南での農業の産業構造および大学生の農業に対するイメージを調べるため、3か所に聞き取り調査をし、斗南にある花市場(雲南の農業の大部分は花産業が占めている)および産業界の聞き取り調査の結果、花の売れ行きは全体的に好調で、花を売る人々との対話でも、特に改善点はありませんでした。次に、雲南民族大学の就職課、および学生への街頭アンケートでは一般大学(農業大学以外)の学生の多くは、農業は重労働であり低収入というイメージを持たれているということを確認しました。雲南白薬(昆明を拠点とする製薬会社)の工場見学では、働く現場を調査することが出来ました。

この調査を経て、老村では15家庭に家庭訪問をした結果、畑の仕事ではもう儲からないので、子供には町へ出稼ぎにでて欲しい、と皆口を揃えて答えていました。しかし、具体的な仕事を知らず、出稼ぎに対する漠然とした期待と憧れが見受けられ、この漠然とした希望を具現化するために、「大学生による模擬職業体験」を提案しました。

慶應義塾大学：三浦愛、雲南民族大学：甘黎王婉婷、雲南師範大学：雷会蘭



**チーム4 教育エネルギー**

私たちのチームが取り組んだテーマは村民の防災意識向上である。エネルギーが村でどのように使われているのか、エネルギーの知識、安全意識に関する計5問の質問をし、聞き取り調査を行った。その結果から、この村では主に火が使用されていることがわかったが、残念ながらエネルギーの危険性に関しては意識が低いことが明らかになった。小学校でも聞き取り調査を行うと、ラオムバ村では全校生徒がそろって火災の知識を学ぶが、実践練習はしたことがないことがわかった。社会貢献プランでは小学生を対象に避難訓練をゲーム形式にした授業を日本・雲南の大学生が定期的に模擬授業を開催することを提案した。実際に、小学1年生、就学未満の子どもたちに模擬授業を行ったが、一度では正しい逃げ方が覚えられず、繰り返し練習していく必要があるのではないかと感じた。就学未満、小学1年生の子どもたちは火災や予防の知識は無い。2年生は知識を持っている子、知らない子がそれぞれ半々であった。このプランを継続させて行うことは将来的にエネルギーに対する意識の向上に貢献することができると思っている。

金沢大学：藤田はるひ、雲南大学：張昱

**各チーム概要**



**チーム5 観光労働**

観光を通して無理のない程度での少数民族の生活の質の向上をはかることが私たちの目的でした。フィールドワークの内容は、昆明市の観光(南屏街、雲南民俗村、民俗博物館、演池)、観光業に携わっている方、老木壩村の村人への聞き取りです。その調査の結果、村人の生活様式がわかったほか、村人は今も民族特有の刺繍をするものの、刺繍をあしらった品物は近くのあまり売れないことに加え、若者たちが刺繍文化から離れており、刺繍ができない若者が増えていることが判明しました。

そこでデザインやマーケティングを専攻とする日本人大学生が、村人に日本人好みの刺繍のデザインや、売り方を提案し、日本でフェアトレードとして販売できれば、公平な賃金で、村人の新たな副業を生みだせ、日本人大学生も自分の専門に関する経験を積むことができ、双方に良い効果が生まれると考えました。最も印象深いのは、ラオムバ村の村人、小学校の先生や子供たちが私たちにに対し非常に親切であったことです。子どもたちのキラキラした笑顔の裏には、病気や家族の問題など、様々な問題を抱えていることには胸が痛みました。

静岡文化芸術大学：佐藤安奈、金沢大学：荒木美紀、雲南大学演池学院：劉依萌、石静



**チーム6 民族教育**

私たちは当初、「継承されている民話などの保存方法」について考えていた。しかし、現地調査の結果、大人から子どもへの文化の伝承は十分ではないことが判明した。現状のままでは名前だけの「少数民族」になってしまう可能性も少なくないように思える。この現状から、私たちは次世代を担う子ども達を対象とした文化継承の方法が大切であると考え、テーマを変更した。昆明市内の活動は、図書館での民話調査や民族大学学生へのインタビュー、民族村や民族博物館の見学などをして過ごした。村では村人へインタビューをした後、子ども達の意識を確認するための訪問授業を行った。これらの活動から私たちは美術系・文系の学生を対象にスタディツアー中に25の少数民族をそれぞれ絵本として製作し、小学校に提供するという社会貢献プランを提案した。日本での下調べというのは大切だけれど、現地に行かなければわからないことがほとんどだと思ふ。事実、当初のプランと発表内容が変わったチームは他にもあった。何よりもやるべきなのは、自分のやりたいことをメンバーにどう伝えるかということだと思ふ。

東京学芸大学：天野結生、雲南師範大学：卞子豪、雲南民族大学：劉慧娟



**チーム7 環境衛生**

私たちのチームはこのスタディツアーにおいて環境衛生に取り組み、ゴミ問題に焦点を当て、この10日間、活動に取り組みました。私たちは中国人が環境問題について、どの程度重要視しているかを知るためにアンケート調査を行いました。また、老村の地方政府を訪問し、村のゴミ問題の調査、老村小学校で環境の大切さについて不用になった新聞でゴミ箱を作って教える授業、また子どもたちとゴミ拾いをするなどを行いました。雲南省環境保護庁へも訪問し、今後、ゴミ拾い運動を継続する場合、支持してくれると仰っていただきました。「社会貢献」とは、文字通り、社会や人の役に立つことであり、決して先入観に任せて、自己満足で行うものであってはいけません。ボランティア活動に参加すると、自己のボランティア像、社会貢献像を強くもった人に多く出会います。ボランティアという活動に批判が付きものなのは、そういった頭の硬い人達が多く存在しているからだと思ひます。その様な凝り固まった主観的な考えを持たないためにも、様々な意見を聞き、これからは色々な視点から「社会貢献」について考えていきたいと思っています。

明治大学：御崎いづみ、雲南民族大学：苞西雲南農業大学：玉応坎



**チーム8 観光農業**

私たちのグループのテーマは、観光農業です。主な活動内容としては、ツアー前半は昆明市内に出向き、市内観光地を訪問しました。農村では小学校の近くを散策し、何か観光資源になるものはないか確認しましたが、これといったものは見つからず、リス族のきれいなデザインの刺繍や、グリーンツーリズムとしての都市からの観光客の農村ステイ体験が考えられると思ひました。メンバーのうち一人は実際に農業体験をし、その話をしてくれました。自分が変わったことは、中国人に対する悪い意味での偏見が少し良くなりました。ここで出会った中国人の友達、日本人の友達より周りのことを思いやれる気が利く方が多くビックリしました。人や物事をステレオタイプで判断するのは良くないことなので、これがきっかけで中国人に対する勝手な悪いイメージが少し和らいでよかったですと思ひます。社会貢献とは、社会という1つのコミュニティの中で自分が人のために活動することだと思ひます。その活動をするにあたって、1人でできることはかなり限られているので、他のサポートがあつてこそ社会に貢献できるのだと思ひます。

東京工業大学：佐生明佳、雲南師範大学：金茹秀、雲南財経大学：秦徳英

**審査員紹介**

今回はこちらの5名の方に審査員をお願いいたしました！お忙しいところ、ご協力頂き本当にありがとうございました！

 昆明理工大学 質量発展研究大学院 教授・青虹麗 先生	 雲南民族大学 日本語学科 日本語教師 後藤裕人 先生	 雲南大学 日本語教師 李月婷 先生	 日本雲南聯誼協会 理事長・初鹿野恵蘭	 日本雲南聯誼協会 スタディツアー団長 林則幸
---	---	--	--	---

優秀賞・受賞チーム

チーム1 栄養改善

謝曦翎

私は第1回スタディツアーにも参加し、今回貴重なチャンスを得られとても嬉しかったです。そしてメンバーの優美さんとまた同じチームを組みました。グループ活動を通してもっと深く交流し、お互いに理解しあえて前以上に仲良くなることができました。



私たちのテーマは栄養教育で健全やかな成長を目指すことです。活動の内容は食事情の調査、身体測定と栄養教育の3つです。その結果から先生方と相談して改善方法を探しました。相談をしていく中で、先生方と食い違ったりなど、最初に考えていたことと実態は全く違っていたので難しかったです。

時折、自分の力の限界を感じましたがカン君と優美さんと一緒に諦めずに頑張って、限界を少し越えられたと思います。自分の成長を実感しました。

私が一番大切だと考えるものはチームワーク、交流とフィールドワークです。この3つがあったからこそ自分の限界を超えられたのだと思います。

そして社会貢献とは、今大学生だからできることに力を尽くして、社会を少しでも改善することではないかと思いました。今回のスタディツアーで自分の成長とプランが出来上がったのは私と優美さんとカン君みんなで力を尽くして、交流したおかげです。

また皆さんと会うことを期待しています。最後に、日本雲南聯誼協会にありがとうございますと言いたいです。

チーム2 口腔衛生

木下千尋

今回、私は2回目の参加です。前回は何もわからずぼぼ行き当たりばったりでしたが、今回はしっかりとした目的をもって望めました。第一回の私が所属していた衛生環境チームが発案した「歯磨きプロジェクト」の続きです。目的は村の方々が歯磨きの重要性を学び、日本企業から提供していただいた歯ブラシを配ることです。第一回よりも事前準備に多くの時間をかけました。川西商事株式会社様とデンタルプロ株式会社様より歯ブラシを提供していただくことができました。心より感謝いたします。



今回も印象に残ったことは多いですが、メンバーの豪くと朱ちゃんが前回よりも自分の考えをしっかり持っていたことです。私が日本で考えてきた社会貢献プランの概要を彼らに伝えると、その後は全て考えてくれました。中国の子どもたちのことは彼らが一番よく知っているの、私が考えるよりもずっとニーズに適したものが出来ました。彼らにとっても感謝しています。何事にも自主的に取り組み、議論し、たわいもない会話をして相互理解を深めたことにより、自分の個性や得意分野を活かしながら、一つの目的に取り組みたのだと思います。これによって優秀賞をいただいたのだと思います。このスタディツアーは自分を知ること、相手を認めること、問いかけること、聞くことなど様々なことを学ぶことができる最高のツアーです。

チーム4 教育エネルギー

藤田はるひ

私はツアー中に「プランを考えるためには問題意識を持つことが大切だ」というアドバイスを受け、一つひとつについて深く考えようとした。その結果、今回の活動を通して思考力が鍛えられたと思う。調査によって明らかになったデータをそのままプランに落とし込むのではなく、実際に体験をすることで気付くことが多かった。例えば、当初は簡単なアンケートのつもりで授業をしたのに、子どもたちは頭を隠すなどの動きはできてものように逃げるのかということまでは知らないことが分かった。



社会貢献とは社会のために役立つことをすることだ。その成果は目に見えて分かるものもあれば、なかなか気付にくいものもある。今回私たちが考えたプランは目に見えてその効果が分かるものではないが、小さな幸せを守ることにつながると思う。大きく考えてしまいがちだが、身近で出来る社会貢献もたくさんあり、周りが気付かないことに気付く大切さを知った。来年も、日本人・中国人学生が協力して、独自の観点からプランを考えて欲しい。農村に行ったり、中国人学生と1つのテーマについてじっくり考えるなど、どれも貴重な経験だった。現状調査からプランを考え出すのは本当に大変だったが、周りの方々のおかげでチームとして意見を高めることができた。皆さんもあきらめずに楽しみながら頑張ってください！たくさんの発見があると思う。



家庭訪問



出発の日、みんなで大泣きました!



老木壩村でレクリエーション!

いただきま〜す!



食文化交流が行われました!

審査員感想



雲南大学 李月婷 先生

今回のスタディツアーの発表に参加させていただき、光栄に存じております。雲南省で日本語を勉強している学生は普段、日本人と触れ合う機会があまりなく、授業で習った日本語を実際の場面に使うこともほとんどないです。日本雲南聯誼協会が主催するスタディツアーの募集を学生に知らせた時、応募者は10名以上もいました。最後の書類選考に受かったのはただの二人でしたが、本番の時、日本人学生の横で流暢な日本語で発表する学生を見て、クラスみんなが積極的に応募した理由がわかりました。ただ二週間のスタディツアーで、その二人の学生は日本語力がぐっと上がっただけでなく、フィールドワークまで出来るようになりました。授業では勉強しそうなものもスタディツアーの間に身についたようです。その二人の学生の成長を見て、言葉の勉強は授業も大事ですが、喋らせるチャンスを与えることも同じように大事だと痛感しました。この場をお借りして、日本雲南聯誼協会に感謝の意を表す上に、雲南省の学生にもっと多くの日本人と触れ合うチャンスを与えるようにお願いします。



雲南大学滇池学院 李淑娜 先生

今までは日本雲南聯誼協会が企画・主催するスタディツアーのことについて、よく知っていると思っていました。私の学生の何人かは何回も参加しているし、同僚の口からもよく聞いているからです。しかし、今回の報告会に出て、やっと本当のスタディツアーに出会うことができたと言いたいです。一組一組の学生の報告を聞いて実に驚いて感動したのです。日本の学生たちは知らない中国の山奥に行って、本気で自分に何が出来るかを考えているのです!中国の学生も教室で学んだ日本語を利用して、一生懸命日本の学生とともに調査を行ったり、計画を立てました。それは、本当に偉いことだと感じます。立てられた計画は今のところ、多分、何もならないかもしれませんが、この活動にこそ大切な意味があるのではないのでしょうか。このような活動は清々しい風のように、日本の学生、中国の学生、山奥にいる子供たちや村の人に新しい空気を注いでいるようです。彼女、彼たちは活動を通して新しい世界に出会うことができました。実は、報告会に参加した私にとっても、とてもいい勉強になりました。できれば、私も今後このような活動に参加し、学生と一緒に成長していきたいと思っております。



アイスブレイキングも兼ねて、2日目には食文化交流が行われました。日本側は出国前に調理実習も行い、それぞれ炊き込みご飯、豚汁、焼きそば、フルーツポンチなどを用意しました。雲南側はタイ族の料理、中国東部で食べられる鶏肉のコーラ揚げ、卵料理等々を用意しました。調理実習で一度は練習していたものの、日本料理を現地の材料で再現するのは難しく、途中で何度も皆で試行錯誤しました。

しかし、絶品料理ではなかったものの、中国勢からは天野さんの炊き込みご飯が最も人気でした。日本勢もタイ族の料理の辛さに驚き、隣国でありながら食の違いに身をもって感じました。日中双方の学生で調理し、打ち解けられたように感じます。(三浦愛記)



左・天野結生 右・三浦愛

# スタディツアーご協力企業からのメッセージ



## 日本と雲南の友好を 雲南省招商合作局

桜満開の三月、私は第二回スタディツアーの学生たちと出会いました。去年の9月、初めて雲南を訪ねて来た学生と深く交流しました。前回と同じく、彼らの元気な姿、独特な視点に感心しました。中国と日本は友好的な隣国です。日本の学生たちは千里を遠しとしない、経済発展した日本から雲南を訪ねて、雲南の大学生とコミュニケーションする上に、環境の厳しさに関わらず雲南の山奥にある小学校に入って当地の教育支援をしました。心を込めて当地の子供たちと交流し、彼らにこの世界への窓を開けました。雲南省招商合作局長の局長として、私は長い間で雲日経済提携、



招商誘致に力を捧げました。日本の若者からたくさん啓発を受けました。彼らは雲南の経済発展の重視また田舎の子供の思いやりに感動されました。若者は国の未来であり、中日友好を進める動力もいえます。両国の若者たちはもっと深く絆を作らないといけません。

最後に招商局を代表して、雲南に来ていただいた若者たちが毎日楽しく過ごせますように祈りを申し上げます。第三回スタディツアーも期待しています。



左・杜勇局長



## 川西商事の社会貢献について 川西商事(株)

弊社川西商事株式会社は「良い物を世の中に！」を会社のコンセプトとし、地球環境への配慮、社会貢献を目指している会社です。地球温暖化・水質汚染の対策用の商品開発に取り組んでおります。例えば、水質汚染対策、水資源への配慮ではハミガキ剤に含まれている発泡剤(界面活性剤)が水質汚染の原因の一つとされております。そこで弊社は環境への配慮として約15年前から「水だけでも磨ける歯ブラシ」の開発並びに販売を行って参りました。水だけでも磨けるメリットとしては、水質汚染の対策はもちろん、漱ぎの際に使用する水量も節約できるので水資



源への配慮にも繋がります。今回、参加者の木下さんから事情を話してもらい、ご協力させていただきました。雲南のお子様は歯磨きの習慣化されるまでは気長に指導していくしかないと思われれます。しかし、弊社のできる範囲内でしたらご協力をさせていただきたく存じますのでまたお声をかけていただけると幸いです。今後は売上げの一部を国内外のボランティア団体や基金などに寄付などを検討しております。



## デンタルプロについて デンタルプロ(株)



親会社である大平工業株式会社が1927年に創業してから88年が経った現在でも、私達

は「製品をお使いになる方々の健康と幸福を祈り、生産と販売に従事する」を基本理念とし研究・開発を進めてまいりました。当社の「信條」に従い、口腔衛生の分野で価値ある製品を消費者に提供することを通じて、社会に貢献してきました。

また、社会の一員として有用な存在であり続けるため、社会規範遵守の責任を果たすだけでなく、積極的な支援活動で社会への貢献を行っています。

支援活動として、デンタルプロ製品一部の生産でお世話になっているタイ王国に2005年より毎年、小学校に図書館(建物・書物)の寄贈を続けており、全社員より毎年募金を募り、小学



校に寄付を行っています。

私達はハブラシが暮らしに溶け込んだ一番身近な健康ツールとして、赤ちゃんからお年寄りまで、幅広い世代に愛されて使われることが使命であると考えています。

いつまでも健康でいるための基礎を支える。これからも安全で安心してお使いいただける製品の提供を心掛け、皆様とともに成長していきたいと思ひます。



## カレーを中国人民食に ハウス食品(株)

日本ではカレーは国民食と言われており、月平均で2回以上食べていただき、子供から大人まで大好きなメニューとなっております。

私も中国でも喜んでいただけると確信して普及活動に取り組んでいます。中国で普及するためにはとにかく一度、食べていただくことから始めました。地道な活動を粘り強くすることが普及の早道だと思っております。現在1年に2万回試食活動をし、発売以来10年が経ちました。徐々に拡大し、昨年大連に第2工場を稼働するまでになりました。

<カレーを中国人民食に>を合言葉にして、さらなる拡大、普及を目指して取り組んでいます。



今回、少数民族の村で日本の学生さんにカレーの試食をしていただき、試食した皆様にはおおむね好評だったとお聞きしました。感慨深いものがあります。いよいよ少数民族の人々にも日本式のカレーが普及できるのではないかと期待が膨らみます。私も食を通じて貢献していくことが使命です。貴協会の皆様と一緒に中国の皆様のお役に立てればと思っております。貴協会のみますますのご発展をお祈り申し上げます。



## リーダーからのメッセージ



リーダー 金茹秀

ツアーはもう終わりましたが、皆さんと一緒に過ごした日々がありありと目に浮かびます。私はリーダーとして、皆さんがずっと協力してくれたおかげでツアーは大成功しました。一番印象的なことは多すぎて数えきれませんが、その中の1つを紹介したいと思います。老木壩小学校に行ったとき、三年生の喬紫燕さんからこのような手紙をもらいました。「お姉ちゃん、お名前は分からないけど、とても綺麗で大好きだよ!」その時、嬉しくてたまらず、私はしゃがんで名札を子供たちに見せました。「これがお姉ちゃんの名前だよ。金茹秀って言うよ。」「じゃあ、秀姉ちゃんって呼んでいいの?秀姉ちゃん!」

彼女の言葉で、いかに私たちは彼女にとって特別な存在だったのか気付ききっかけになりました。子どもたちは日本語が分かりませんが日本人のお姉さんたちと仲良くなって、一緒に遊んだり、絵を描いてもらったり、授業も受けていい経験になりました。それに、子供が私たちに尊敬していて、私たちは子供たちに信頼されて、それはどんなに幸せなことでしょう。この経験も私にとって大切な宝物です。そして、協会にも感謝の意を表したいです。このような機会を作ってくれて本当にありがとうございました。皆さん、お疲れ様でした!また逢いましょう!



リーダー 渡部優美

2回目となるこのツアーで嬉しかったことは、老村の人々が私たちのことを覚えていてくれて、「心の交流」を交わせたことです。顔を合わせるなり、第1回目で一緒に走り回った子どもたちが駆け寄ってきてくれました。先生方は全く伝わらない発音をする私に笑いながらも、食事を勧めてくれ、お忙しい中様々な質問にも答えてくれました。

ツアー全体を見ると、前回は日本の学生にリードしてもらった雲南の学生も前回の経験を活かしてリーダーシップを発揮し楽しんでいた姿に成長を感じました。多種多様なメンバーがいなければ得られなかったことが多くありました。今回のツアーは日本学生は全員女性、雲南学生も7割が女性で、少数民族の女の子を支援する聯誼協会にふさわしいツアーでした。これからは男女関係なく活躍する社会です。このツアーで発揮した積極性を社会に出ても発揮し続けることが、私たち女性に求められることでしょう。

「未来は私たちの手に、私たちが明日を創る」ツアーで走り続けた参加した学生メンバーの皆へ、一緒に走り続けてくれてありがとう!このメンバーで雲南を楽しむことが出来て幸せです。応援をしてくださった関係者の皆様、感謝とお礼を申し上げます。この経験を胸に更に走っていきたいと思ひます。



劉泓韻

僕は老村の引率者として口腔衛生、栄養改善、労働、環境衛生チームと一緒に村を訪れました。第1回、2回目の参加者がチームを作って一緒に行動する様子を見つめてきました。

例えば環境衛生チームは第1回、2回の参加者が混ざっているチームで、この班は折り紙を使ってゴミ箱の折り方を教える授業をして環境問題への意識を持たせる試みを行い、出来上がったゴミ箱を嬉しそうに子どもたちが使っていたのを見てほほえましく思いました。さらに1,2回目の学生が協力合せて授業を成功させていたことが素晴らしいです。僕はツアー前に先生方と打ち合わせ中に現地の状況をたくさん聞かせてもらい、やはり先生方でさえも現在の中国の教育システム



について非常に頭を悩ませているのがわかりました。ですがこういった問題を「現地に行って体験する」ことができるからこそ、学生たちは頭を悩ませながら折り紙でゴミ箱を作ったり、歯ブラシを日本から持ってきたり、子供たちに身体測定をするといったような新しい発想を引き出すことができたのだと思ひます。空港で日本の学生方を迎えたときと、発表審査会を終えた後の皆の表情は、少し大人になったような、そんな雰囲気を感じました。



## 編集後記

廣瀬園子

私は観光労働、教育エネルギー、観光農業、民俗教育の4チームと老木壩村に滞在しました。今回の滞在で村の子どもたちは日本・雲南から来る大学生を非常に楽しみにしていることがよくわかりました。その理由に第1回目スタツアに参加した学生の顔と名前を覚えている子がおり、私に「〇〇お姉ちゃんはどこ?」と聞いてきたからです。また、編集を通じて学生の感じたことを知ることができました。理事長がよく言うように、出会いは素敵!スタディツアーは人と人を繋げる役割があると思ひます。大学生だからこそできる社会貢献をしながら、一緒に勉強し、遊び、友達ができます。その小さな積み重ねが日本と雲南の大学生が繋がり、大学生と村人、日本人と中国人が繋がり、そして世界がひとつになるのだと信じています。